

インドネシアのバリ島に住むムラティとイザベルは、島の美しい自然を守るためにレジ袋をやめよう！という活動をしています。レジ袋は自然にかえすことはできません。それなのに、身勝手なポイ捨ては後を絶ちません。捨てられたレジ袋のほとんどは海に辿り着いて、海水を汚染し、生き物たちを傷つけています。残りはゴミ捨て場で焼却され、大気中に有害なダイオキシンをまき散らします。「キミたちには若すぎる、とかキミたちには分かりっこないなんて誰にも言わせないわ」とイザベルは他の活動家たちに訴えました。「簡単なことだなんて言わない。でも、これはやる価値があることだって伝えたい」

どんな問題にとりくんでいるの？

昨年、ジョージア大学（米国）主導で、世界 192 カ国を対象に行われた研究によると、インドネシアは中国に次いで世界で 2 番目に海中のプラスチックゴミが多い国であることがわかりました。2010 年の数値では、海岸から 50km 圏内に暮らすインドネシア住民だけで、世界合計の 10%にあたる 322 万トンの“正しく廃棄処理されていない”プラスチックゴミを排出しています。



なぜ、その問題にとりくもうと思ったの？

バリでは、多くのゴミが回収されません。一部のプラスチックは燃やされて、蒸し暑いお昼どきに、鼻をつく煙が漂ってきます。川にただ捨てる、という場合もあります。「バリでは、1日に約 680 立方メートルのプラスチックゴミが出ます。これは 14 階建てのビルに相当します」イザベルは TED の講演でこう話しました。「そして、レジ袋においては、リサイクル率はたったの 5%以下です。」



どんな活動をしたの？

この活動を始めた時、まだムラティは 10 歳、イザベルは 12 歳でした。2018 年までにバリでのレジ袋使用を廃止しよう市長に約束してもらうために、請願書の作成、ビーチの清掃活動、さらにはハンガーストライキ（！）まで実施し、ようやく彼女たちの努力は実りました。彼女たちは、地元のお店が使える「レジ袋廃止宣言」シールもつくりました。



今後について

姉妹はエコバッグのつくり方、ゴミの管理の仕方、ゴミによる汚染の情報などが載っている小学生向けの教育冊子を制作中です。ムラティは言います。「教育なくしては変化は起こせないからね！」

Follow them
online

<https://www.facebook.com/byebyeplasticbags/>

https://www.ted.com/talks/melati_and_isabel_wijzen_our_campaign_to_ban_plastic_bags_in_bali?language=en



次はキミの番だ！

世界を変える第一歩、あなたにはなにができるかな？



エリフ・ビルギンは、物心がついたころから好奇心旺盛な子どもで、たくさんの面白い発見と発明をしてきました。環境問題、特に石油を原料としたプラスチックに興味を持ち、のちにそれは自然にやさしいプラスチックを発明するきっかけとなりました。彼女は研究と実験に2年を費やし、エジソンのように「12通りのうまく行かない方法を見つけた」のでした。最終的に、エリフはわずか16歳にして、“バナナの皮を原料としたバイオ・プラスチック”の最初のサンプルを作り出しました。

どんな問題にとりくんでいるの？

大都市での生活は環境問題も深刻で、エリフは気候変動と戦うために自分も何かできないかと思いました。

なぜ、その問題にとりくもうと思ったの？

石油から作られるプラスチックは膨大な汚染の原因となっていること、そしてバイオ・プラスチックは低予算で作れる優れた代替品となることを知りました。

どんな活動をしたの？

たくさんの研究の末、エリフはバナナの皮でバイオ・プラスチックをつくる方法を開発しました。作り方はとても簡単で、家でも作ることができます。

「私の目標は、今まで用いられてきた石油を原料としたプラスチックに代わる新たなものとして、バイオ・プラスチックをつくる方法を発見することでした。そして、バナナの皮を使って、腐ることのないプラスチックを作り出すことに成功しました。私が編み出した方法はすごく簡単で、誰でも自宅で作れるほどです。つまり、誰もがこのプラスチックを使うことができます。私たちの美しい地球は、石油由来のプラスチックの生産による大気・土壌・水などの汚染から守られるのです。」とエリフは言います。

今後について

「バイオメディカル工学とコンピューター・サイエンスの学位を取って、人のためになるようなテクノロジーの仕事に就きたいの。」—エリフ・ビルギン, 2016年8月



12 RESPONSIBLE
CONSUMPTION
AND PRODUCTION



13 CLIMATE
ACTION



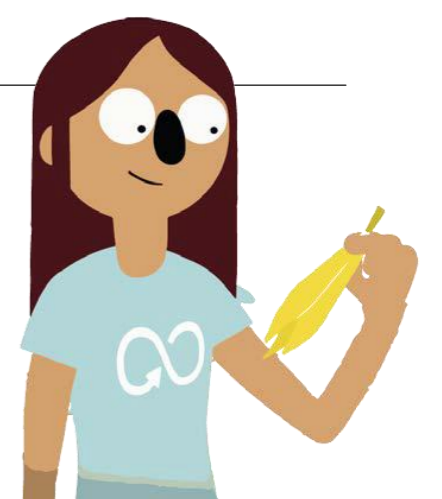
Elif in action

<https://www.youtube.com/watch?v=BMR-oMpCbjo>



次はキミの番だ！

世界を変える第一歩、あなたにはなにができるかな？





荒れたスラム街を住民たち自身で変えるために、地元の若者たちが立ちあげた「アーバン・クリエイター」。彼らは、都市のスラムの改革と自立をすすめて、さらに他の地域と繋ぐことで、安全で生き生きとした街をつくりあげました。彼らは変革者です。語り手であり、都市で農業を行い、人と人を繋ぎ、そして啓発者でもあります。彼らは自分たちの街を活性化するために、自分たちの手で、知識や技術を伝え、人財育成なども行っています。さまざまなネットワークを使って、自立と地域に根差した経済発展を進めています。そのような活動に多くの情熱的な社会企業家や都市計画者（＝urban creators）が賛同しています。

どんな問題にとりくんでいるの？

「アーバン・クリエイター」は、社会の中でつくられてきた様々な“壁”を超えて、地域がひとつになることを目的に集結しています。人々の能力を伸ばし、地域の経済力をつけ、食育（作物を育てたり、健康的な食事をとるなど）を通じて地域の問題に向き合っています。

なぜ、その問題にとりくもうと思ったの？

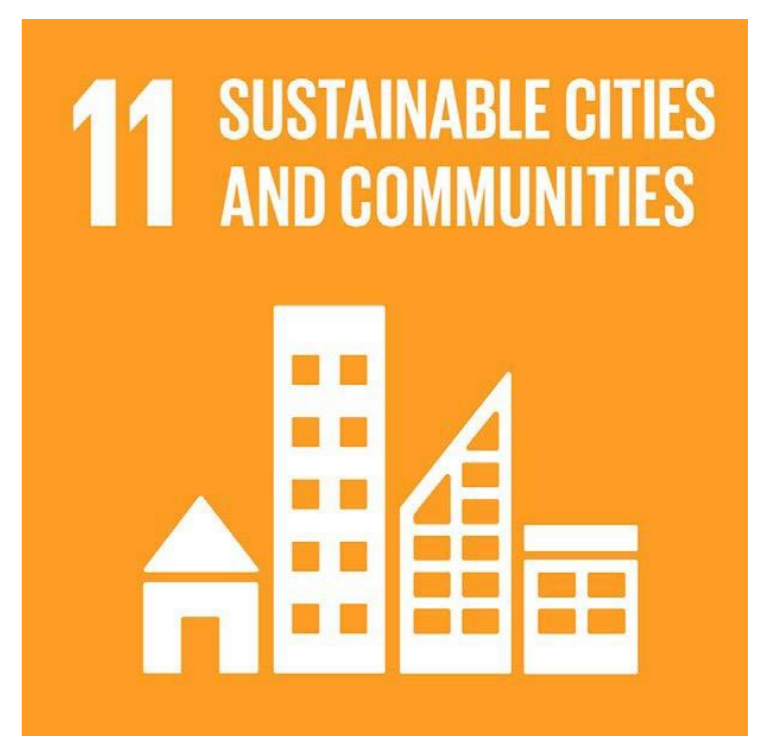
荒れたスラムや負の連鎖に陥っている貧困問題、食の安全、格差の問題などを根本から変えるべく、さまざまな能力を持った若者たちを集めるところからスタートしました。

どんな活動をしたの？

彼らは、まず地域住民や関係者からのアイデアや意見の聞き取りを行い、活動方針を決めることに最初の一年を費やしました。二年目は 11 番地とダコタ・ストリートの角にある2エーカーの空き地のがれきを掃除し、汚染されていた土をきれいにするために、この活動で初めての種まきをしました。三年目。荒れていた土地は命を育てる場所に姿を変えました。そして、育ったのは植物だけではありません。都会での農業技術やイノベーション・センター、彼らの街も大きく変わりました。

今後について

今、彼らはたくさんの地域住民たちにオーガニック食材を提供しています。また、このプロジェクトを大きくしていくために、レストランなどに販売し、資金調達をしています。さらに、毎年 1,000 人以上の学生たちや 50 人の前科のある人たちに対して、地域の整備・長い目で見たまちづくり・農業などの研修も行っています。



Follow them online

<https://www.facebook.com/phillyurbancreators/>



次はキミの番だ！

世界を変える第一歩、あなたにはなにができるかな？



私たちが使える水は限られていて、これはすでに世界のたくさんの場所で問題となっていますが、じきに地球規模の課題となることでしょう。だからこそ、トイレを流すのに毎日何千リットル、何万リットルもの処理された水を無駄使いし続けていることを考えなくてはなりません。世界の人口約70億人のうち3分の2がトイレを使える生活をしていることを考えると、大量の水が使われていることとなります。ロヒットはトイレで流す水の量を減らすために水洗トイレの仕組みを再検討するプロジェクトを始めました。そして、従来のトイレの水を流す仕組みにちょっとした工夫をすることで、排水量を減らすことに成功したのです。彼はこの仕組みを「バキュ・フラッシュ (Vacu Flush)」と呼んでいます。

どんな問題にとりくんでいるの？

インドの一部地域では、急速に増える人口に対して、トイレなどの衛生施設の設置が追いついていません。また、衛生施設が全くない地域もあります。

なぜ、その問題にとりくもうと思ったの？

(衛生設備には水が必要なので)、干ばつによる水不足は大きな問題につながります。水が足りないと衛生設備を機能させることが難しくなり、下水や汚物に人が触れることで、病気にかかる人が増えてしまいます。

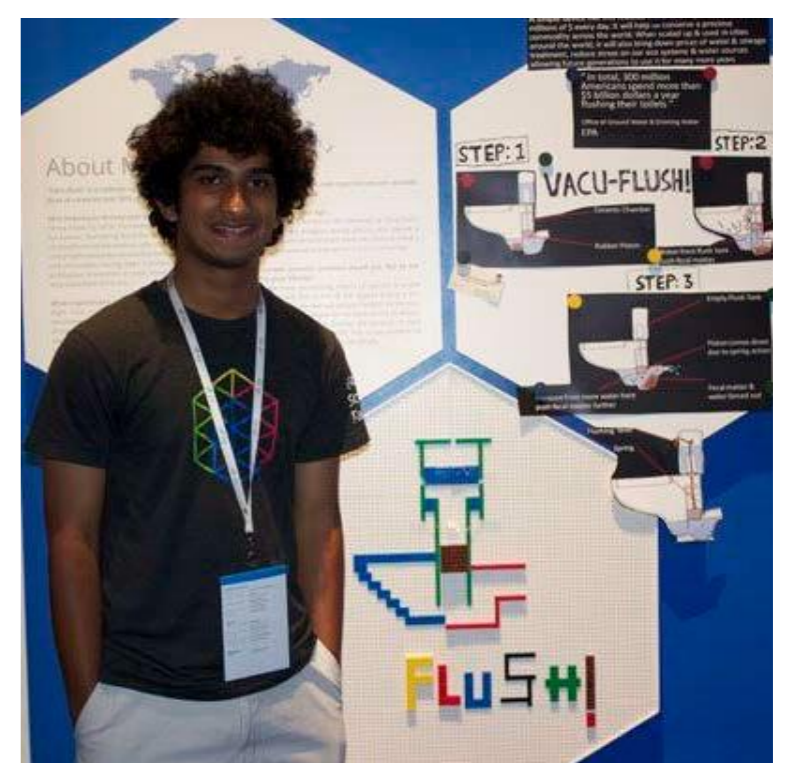
どんな活動をしたの？

ロヒットは16歳の頃、「きれいで安全な水が足りていない」というインドが抱える問題について考えるようになりました。彼は言います。「その時に、衛生的で、安心で、安く、効率的に水を使える解決法を絶対に見つけようって思ったんです。」

ロヒットはペダルの構造を使った節水トイレを何度も試作し、ついに流すのに必要な水の量を6リットルから3リットルまで、50%削減した仕組み「バキュ・フラッシュ」を完成させました。この発明でロヒットはGoogleサイエンスフェア2012のファイナリストにも選出されました。

今後について

「将来、環境に関するプロジェクトをもっとやっていきたい。今一番やりたいことは、要らないものや捨ててしまうもので温室をつくることです。」



Rohit in action

<https://www.youtube.com/watch?v=GjMPLL8n4Kc>



次はキミの番だ！

世界を変える第一歩、あなたにはなにができるかな？



「ディスカーディアス」は、2015年のテクノベーション・チャレンジという大会で「チーム・チャリス」が発表したアンドロイド携帯向けのアプリです。チーム・チャリスは、地域を良くしていこうと情熱を燃やす若者たちが集まって結成された団体です。彼女たちの最初の出会いは高校で同じクラスになった時でした。卒業後、iKapture Afterschool Academyで再会を果たし、初めてプログラミングに挑戦しました。メンバーそれぞれが様々な経歴をもつにもかかわらず、力を合わせる事ができたのは、全員が前向きな変化をもたらすことへ興味を持っていたからです。

「全ての若い女の子たちは、どんなに高い壁でも乗り越えられる可能性をもっています。それは、本人の意識と、自己評価によって変わります。インターネットを悪用するのではなく、人生を変えるきっかけとして使うのです。」—グレース・アクポイロロ（チームリーダー）

どんな問題にとりくんでいるの？

アプリ「ディスカーディアス」は、多くのナイジェリア人が直面している課題“きちんと廃棄されないゴミや廃棄物による健康被害”への挑戦です。



なぜ、その問題にとりくもうと思ったの？

彼女たちが住んでいる地域では、それまで自治体によるゴミ管理が徹底されておらず、特に路上においては、それは深刻な問題でした。

どんな活動をしたの？

プレイズ・デイビッド=オク、ソナム・クマー、ソメソマ・オグボンナ、グレース・アクポイロロの4人は、ナイジェリアのゴミ捨て問題に立ち向かうべく、この携帯アプリを開発しました。開発には、アプリ開発用のソフトウェアMIT App Inventor 2を利用し、アンドロイドの携帯を使ってテストをしました。リリースしたアプリは個人でも企業でも利用可能なもので、少額の費用で、ゴミを撤去してくれるエコ・フレンドリーな三輪カートを呼ぶことができます。このアプリは、ゴミ問題を減らしてより良い持続可能な街をつくれるだけでなく、雇用の機会も生み出しているのです。

今後について

彼女たちは今後、ビジネスを展開させたいと考えています。そして、事業をスムーズに拡大するために若者向けの研修を行い、目標をできるだけ早く達成したいと考えています。さらに、（彼女たちのように）若い女の子たちが次のテクノベーション・チャレンジの大会に出場してくれるように盛り上げていきたいと思っています。

**8 DECENT WORK AND
ECONOMIC GROWTH**



**12 RESPONSIBLE
CONSUMPTION
AND PRODUCTION**



Follow them online

https://twitter.com/TeamCharis?ref_src=twsrc%5Etfw



次はキミの番だ！

世界を変える第一歩、あなたにはなにができるかな？





彼女は、マズーン・アルメレハン。ヨルダンにある難民キャンプで、女の子が教育を受ける権利を奪われないように長い間かけて活動してきた16歳のシリア人少女です。マズーンと家族は、紛争が起きたシリアから2013年に逃げてきました。難民キャンプでの生活は当然ながら大変です。その結果、多くの若いシリア人女性が、安全な暮らしを求めて18歳になる前に結婚しています。ヨルダンの難民キャンプでは、実に3分の1近くのシリア人少女たちが18歳を迎える前に結婚します。マズーンは、こうした女の子たちが学校に通い続けられるよう、そして早婚より教育を選んでもらえるように、情熱を燃やしています。

どんな問題にとりくんでいるの？

過去3年のあいだに、ヨルダンに暮らすシリア難民の早婚は急増しました。ユニセフによると、2014年、シリア難民の結婚の25%が15-17歳の子どもたちによるものでした。終わりが見えない残忍なシリア紛争で困窮した難民たちは、娘たちの将来を守るための手段として早婚させることを考えるようになっていったのです。

なぜ、その問題にとりくもうと思ったの？

「多くの親が、自分の娘が幼くして結婚した場合、その子が守られると思っています。彼らは、その結婚によって娘の身に何か危険なことが起こるかもしれない可能性に気づいていません。もし結婚生活が上手く行かなかった場合、その子の立場はとても弱いものとなってしまいます。」とマズーン。

「教育はとても大切です。なぜなら、教育は私たちが危険から守ってくれる盾になるからです。そして、教育は身の回りの問題を解決するための手段になります。」さらに、マズーンは言います。「教育を受けられなければ、自分で自分を守れません。」

どんな活動をしたの？

2年のあいだ、マズーンは自分の暮らしていたアズラキャンプの一軒一軒を訪ね、娘に結婚を勧めるのではなく学校に通い続けさせるように説得する“One Girl キャンペーン”を続けました。

マズーンは、パキスタンの教育改革を訴えてタリバンに銃撃されながらも生き延びた少女マララ・ユスフザイさんになぞらえて「シリアのマララ」と呼ばれています。

今後について

「ジャーナリストになりたいの」とマズーン。「ジャーナリストはすごく素敵な仕事だと思っているわ」



**Muzoon Speaks
about Education**

<https://www.youtube.com/watch?v=zBzYG3Jr80k>



次はキミの番だ！

世界を変える第一歩、あなたにはなにができるかな？

